

調査結果から見られる特徴的な成果と課題

- 令和7年度全国学力・学習状況調査で、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という質問に肯定的に回答した割合は、小学校で91.5%であり、全国を1.1ポイント上回っています。また、中学校で89.6%であり、全国を1.3ポイント上回っています。
- 同調査で、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した割合は、小学校国語と小学校理科で、全国をやや上回っているものの、同様の質問について、それ以外は小・中学校ともに全国を下回っています。

調査結果の分析内容

【ちらし】

よさ2 使い方

手などをふくだけではなく、身に着けたり、物を包んだりすることもできます。
身に着ける使い方
あつい日に、水でぬらして首にまくと、すずしく感じます。また、外で作業をするときに頭にかぶると、あせをきゅうしゅうし、両手が空くので仕事がしやすくなります。
物を包む使い方
手ぬぐいは、いろいろな物を包むことができます。

このように、手ぬぐいには、いろいろなよさがあります。みなさんもぜひ使ってみてください。

【調べたこと】

(本を読んで分かったこと)	(使ってみて分かったこと)
○ブックカバー ・何回か折るだけで、すぐに完成する。 ・本の大きさに合わせて包むことができる。 ○ペットボトルカバー ・ペットボトルを包んで持ち運ぶことができる。	○ブックカバー ・よごれがつくのを防ぐことができてよかった。 ・落としたときに、本がきずつかなかった。 ○ペットボトルカバー ・水できが荷物につかなくてよかった。 ・温かい飲み物が冷めにくかった。

条件

- 「ちらし」の部を書き直し、くわしくすること
- 「調べたこと」の(本を読んで分かったこと)と(使ってみて分かったこと)のそれぞれから
- 六十字以上、百字以内にまとめて書くこと。

2 山田さんは、「ちらし」の書き表し方について友達に相談し、「ちらし」の部を書き直し、くわしくすることを見直しました。あなたが山田さんなら、どのように書き直しますか。どのような条件に合わせて書きましょう。

北海道教育大学附属函館中学校副校长 黒田 諭
(元国立教育政策研究所学力調査官)

- 本道において、継続的に進められている各教科等での言語活動の工夫により、学習したことが将来役に立つと考えている児童生徒の割合は、特に国語科で高い傾向が見られます。このことは、現行学習指導要領に、全ての学習の基盤となる資質・能力として示されている「言語能力」を日常生活や社会生活で生かそうとする意識の表れであると受け止めることができます。
- 一方、各教科の記述式や短答式の問題では、解答の条件を満たしていないために誤答になったり、はじめから無解答だったりしたものが多く見られます。この要因の一つに、身に付けた「言語能力」が、他の学習の場面で十分に発揮されて(転移して)いない状況があると考えられます。

<例1>小学校国語2三

「取り上げて」→表現を盛り込む
「踏まえて」→内容を盛り込む

・ **A** と **B** のそれだから 取り上げて

「AとB(のそれ)から」→両方とも必要
「AやBから(選び)」→どちらか一方でもよい

本道では、左に示した、**本を読んで分かったこと**、**使ってみて分かったこと**のどちらか一方しか取り上げていなくて誤答になったものが21.2%ありました。

<例2>中学校数学6(1)

・ **連続する** 2つの3の倍数が、例えば、①、②のとき

「連続する」→この設問の場合は、3、6など

本道では、①、②に「3、9」など連続しない2つの3の倍数を入れて誤答になったものが14.1%ありました。

今後の改善に向けて

- 日頃のテストなどによる評価の場面で、「言語能力」の育成に関わって、児童生徒に次のことを意識させましょう。
 - ①問題でどのような言語活動が想定されたり展開されたりしているかを把握する。
 - ②問題文に用いられている各教科の学習用語に留意とともに、これまでに学習したことを見出し、今回の問題の設定や条件に当てはめて考える。
 - ③特に記述式や短答式の問題では、解答に必要な条件を理解した上で、相手（先生など）に伝わるように解答する。
- 授業される先生方は、次のことを意識しましょう。
 - ①授業における言語活動のさらなる充実を進める。児童生徒の実態に応じて多様な言語活動を構想する。
 - ②各教科等で身に付けた学習用語などについて、他の学習や生活の場面に当てはめて（転移させて）考えたり表現したりすることができるよう指導を工夫する。

<例1>

全国学力・学習状況調査やCBA学力テストなどの設問文にある「AとBからそれぞれ取り上げて」、「連続する」、「自分の考えを具体的に」など、児童生徒がすでに理解していると考えられる言葉について、当該の設問だけではなく、他のテストや授業中の発問などにも用いる。

<例2>

各教科等で身に付けた学習用語などの概念的な理解がさらに進むように、授業中に用いた教材や学習場面にとどまることなく、他のどのような学習や生活の場面と関係するかを言葉を用いて想像させたり例示させたりする。

- ③目的、相手、場面、意図などを意識した言語活動を構想する中で、互いの考えを伝え合う場面を多く取り入れる。

<例>

各教科等で自分の考えを書く場面において、児童生徒が「書きたいように書く」のではなく、「目的や相手に応じて書く」ことができているかを確認させる。



小中高12年間を一体的に捉えた観点での分析と考察

- 令和6年度北海道高等学校学習状況等調査で、「授業で学んだことを、他の学習で生かしている」という質問に肯定的に回答した割合は、69.8%です。身に付けたことを他の学習や生活の場面に生かそうとする意識は、言葉を介在させて、言葉を駆使して考えたり表現したりするという観点から、小中高ともすべての教科等において重要です。

<例>



【各教科の学習】



【総合的な学習（探究）の時間】



【地域での活動】

- 「言語能力」の育成に関わっては、小中高12年間を通して意図的・計画的に指導を継続することが大切です。重要な視点としては、単に「教え込む」のではなく、常に言葉そのものを活用させる指導を工夫することです。本資料では、全国学力・学習状況調査の結果から、問題文を適切に把握し解答することができていない事例を紹介するとともに、日ごろのテストや授業の場面での留意点について、ポイントを絞って提示しています。まずは、これらの提示内容を今一度確認していただければと思います。その上で、現行学習指導要領総則編の解説に、中央教育審議会答申を引用する形で示されている以下の内容について、必要に応じて、児童生徒の学習場面における具体に当てはめて検討していただければと思います。

(言語能力を構成する資質・能力／思考力・判断力・表現力等)
テクスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

調査結果から見られる特徴的な成果と課題

北海道教育大学旭川校教育学部准教授 山 中 謙 司
(元国立教育政策研究所学力調査官)

- 授業でICT機器をほぼ毎日使用したと回答した児童生徒の割合は約6割で、全国に比べ高い。
- 児童生徒同士がやりとりする場面でICT機器をほぼ毎日使用したと回答した学校の割合は約3割。
- 児童生徒のICT機器を使用する頻度と各教科の正答率・スコアとの間に、一定の関係が見られる。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実装に向けて、ICT機器を効果的に活用することがポイント。

調査結果の分析内容 中学校 理科 大問9(1)

理科の授業で学習した空気について、科学的に探究しました。

(1)、(2)の各問いに答えなさい。



缶を見て、缶がつぶれた理由を予想しましょう。
予想を記述したら先生に送信しましょう。
タブレット上に、みなさんの【予想】(図)を共有します。



図【予想】を共有した画面



動画

学習した内容をもとに、振り返っています。



学習を終えて、自分の考えがどのように変化したか、Aさんに【振り返り】を発表してもらいましょう。



Aさんの【振り返り】
わたしは煙のようなものが上がったので、最初は燃焼が起こって缶がつぶれたと思いましたが、状態変化によって缶の内側と外側で圧力の差ができたからと分かりました。…

(1)

Aさんの【振り返り】は、Aさんの【予想】から学習した内容が反映されたものになっています。

Aさんの【予想】として最も適切な右の1つ選びなさい。

Aさんの【予想】

煙のようなものが
上がる化学変化が起
こったのではないか。

缶の中の水蒸気が水
に戻って、体積の変
化が起きたと予想す
る。

温めると缶の中の空
気の体積が大きくな
るように、冷えると
空気の体積が小さく
なると考へた。

- 本問は、気圧について科学的に探究する場面において、状態変化や圧力に関する知識及び技能を基に、予想が反映された振り返りについて問うことで、探究の過程の見通しについて分析して解釈できるかどうかを見る。
- 本問では、「最初は燃焼が起こって」という振り返りに対して、Aさんの予想を「化学変化が起ったのではないか」と指摘し、他者であるAさんの探究の過程を正しく捉えることが求められる。
- 本道の正答率は、32.0%であり、探究の過程の見通しについて分析して解釈することに課題があると考えられる。
- 生徒が、探究の過程を通じて課題を解決することを通して、科学的に探究する過程の理解が求められる。
- ICT機器を活用して、自分の探究プロセスを記録・可視化し、振り返りを通して次の学びに生かす力が求められる。

今後の改善に向けて

■ICT活用の質的向上

使用頻度は高いが、探究過程の分析・解釈力に課題があるため、単なる提示や記録から、思考の可視化・対話促進へ重点を移す。

■協働的学びの強化

クロス集計の結果によると「ICTを活用すると友達と考えを共有したり比べたりしやすくなる」と答えた児童生徒の割合と、「話合いで考えを深めたり新たな考えに気付いたりした」と答えた児童生徒の割合には強い相関が見られることから、共有型デジタルノートやクラウド上での意見マッピングなど、相互参照を容易にするツールを活用し、児童生徒同士の比較・検討を促進する。

■探究の各段階でICT活用

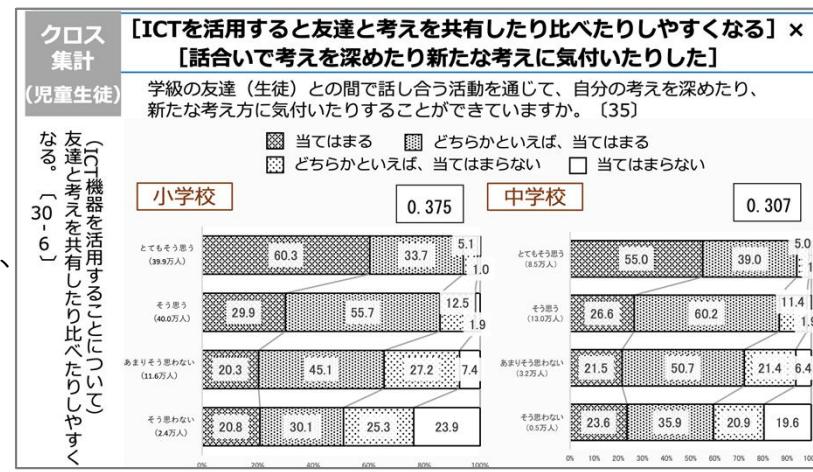
予想・観察・考察の過程でICTを用い、思考の変化を記録・共有することで、見通しを持ち再構成する力を育成する。

■メタ認知的学びの促進

ICTによる記録・振り返り機能を活かし、自分の探究過程を省察し次の課題を見通す力を育成する。

■教師の役割

ICT活用を通じて「情報活用力」「協働的思考力」「科学的探究力」をバランスよく育成できる授業設計を推進する。



国立教育政策研究所 令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果（概要）

小中高12年間を一体的に捉えた観点での分析と考察

小学校段階では、ICTを通じて身近な事象や学習内容に関心をもち、記録・整理・共有を通して「気づく」「試す」といった学びの芽生えを支えることが基礎となる。中学校段階では、得られた情報や成果を整理・比較し、根拠をもって説明する活動を通して、思考の可視化と論理的な表現を重視することが求められる。そして高等学校段階では、複数の情報を統合し、課題の本質を見極めて自ら課題を設定するなど、情報を基に社会的・学問的に探究する力の育成が目標となる。

このように、ICTを「学びの連続性を支える共通の学習基盤」として位置付け、段階的に活用の在り方を設計することが重要である。特に、記録・共有・省察という学習サイクルをICTでつなぐことで、児童生徒が自分の思考や学びの変化を自覚的にたどることができる。さらに、学校種を越えて学習履歴や成果を共有する仕組みを整えることで、個々の成長を見通した教育デザインが可能となる。

今後は、ICTを通して育成すべき資質・能力を12年間の学びの系統性の中で明確化し、各学校段階での指導と評価を連動させることが、持続的な授業改善と学びの質の向上につながると考えられる。